

春日東塔院の発掘調査　平城第 477 次調査　発掘現場説明資料

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所・奈良国立博物館

1．はじめに

(1) 今回の調査の目的

奈良国立博物館の敷地内に、本来、春日大社に属していた東西の塔の跡があることは、意外と知られていなません。しかしすでに 1965 年に奈良国立博物館により両塔についての発掘調査が行われており、遺跡の状況が明らかにされています。以後、40 年以上の年月が経過したが、塔跡の保存は必ずしも十全とは言い難く、また特に塔を囲む塔院の実態には不明な点が残されています。今後、この一帯の遺跡の保存を十全に進めていくために、以前の調査遺構の測量上の位置確認の必要性もあることから、奈良博本館（現在の「なら仏像館」）の南東、1965 年に発掘調査が行われていない東塔院北東隅推定地を中心に発掘調査を行うこととしました。

なお、今回の調査は、ともに独立行政法人国立文化財機構に所属する奈良文化財研究所と奈良国立博物館による初めての共同発掘調査です。

(2) 春日東西塔の概略

春日大社は藤原氏の氏神で、神護景雲 2 年(768)に春日御蓋山麓^{みかさ}に創建されたと伝えられています。中世以来、伊勢神宮・石清水八幡宮と並んで三社と称せられ、広く信仰を得て発展しました。神仏習合の影響により、永久 4 年(1116)に閑白藤原忠実の発願によって春日西塔(「殿下御塔」ともいう)が建立され、保延 6 年(1140)に鳥羽上皇の発願によって春日東塔(「院御塔」ともいう)が建立されました。しかし両塔は治承 4 年(1180)に平重衡の焼き討ちにより焼失しました。東塔は建保 5 年(1217)に再建され、西塔は宝治年間(1247～1248)に完成したとされています。再建された春日東西塔の姿は『春日宮曼荼羅図』に描かれており、両塔は南面を複廊、東・西・北の 3 面を築地塀で囲われ、院(西塔院・東塔院)を形成しています(図 1)。この両塔も応永 18 年(1411)に雷火によって失われ、以後、再建されることなく現在に至っております。なお応永以後、このあたりには、興福寺の子院である法雲院・観音院・宝蔵院等があり、江戸時代中期に描かれた「奈良町絵図」によると、興福寺一乗院の下屋敷があったことが知られています。

(3) 1965 年の調査及び今回の調査

1965 年 5 月 13 日から 7 月 25 日にかけて、奈良国立博物館が東西塔及び南面の複廊部分を中心に調査を行い、東西両塔の基壇や南面の回廊を確認しています。また東西塔院の区画施設に関しては東・西・北の 3 面について調査を行っています(図 2・図 3・図 4)。この調査によって、東塔院の規模は東西約 70m、南北約 80mであることが明らかになっています(図 5)。

今回の調査は、1965 年の成果をうけて、春日東塔院の北東隅を解明し、遺跡の範囲を押さえることを目的としています。そのため奈良国立博物館なら仏像館（本館）の南東に計 219 m²（うち 8 m²は北門推定位置）の調査区を設定し、2010 年 11 月 15 日より調査を開始しました。調査期間は 12 月 27 日までを予定しています。

2．主な検出遺構

検出遺構は以下の通りです(図 6・図 7・図 8)。

溝（外側の雨落溝）

幅約 1 m、深さ 5 ～ 20 cmの L 字型に折れ曲がる素掘りの溝。東西方向で約 7 m分、南北方向で約 7.5m分を検出しました。2 時期の溝が重なっています。遺物を多く含む溝の幅は約 65 cm。東西方向の部分は 1965 年の調査で区画施設の外側の雨落溝と考えた溝よりも約 2 m南の位置で検出しました。なお 1965 年の調査で外側の雨落溝と考えた遺構は、今回の調査によって下層遺構であることが明らかとなりました。東西方向の溝は瓦・土器・径 10 cm弱の礫を多く含み、南北方向の溝は瓦を多く含んでいます。瓦は平安時代末から鎌倉時代前半のもので、区

画施設の屋根に葺かれていたものと考えられます。なお 1965 年の調査では東塔院西面や南門において、雨落溝に伴う玉石列が発掘されており、東面や北面の雨落溝も側石や底石として玉石を伴っていた可能性が考えられますが、今回の調査では確認できませんでした。

落ち込み

東西 4 m以上、南北 5 m以上、深さ 25 cm以上の方形の落ち込み。内側の雨落溝の想定位置にあり、平安時代後期の土器や近世の染付・軒瓦などが出土しています。東塔院区画施設の内側（内庭部）にあたることが知られています。本来あったはずの内庭部は、この落ち込み遺構により削平されています。

溝（外側の雨落溝）と落ち込みの間の位置には築地塀や回廊などがあったと想定されますが、これらの痕跡は今回調査区では確認できず、後世に削平されたと考えられます。

下層遺構

検出した範囲が非常に限られていますが、調査区の一部で東塔院よりも古い時期の遺構を検出しました。調査区の北辺で 2 ヲ所の礫敷を検出しました。この礫敷は調査区外の北側に広がる可能性があります。この他の下層遺構として、土坑 3 基・礫敷 1 ヲ所を確認しています。

その他の遺構

溝（外側の雨落溝）と落ち込みの間に遺構（土坑・溝）を検出していますが、時期及び性格は不明です。

3．まとめと今後の課題

今回の調査によって以下のことが明らかとなりました。

(1) 春日東塔院の北東隅の確定

今回の調査によって、春日東塔院の北面及び東面の区画施設に伴う外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の北東隅の位置が確定しました。外側の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根には瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられます。L 字型に折れ曲がる外側の雨落溝と瓦の出土状況は、『春日宮曼荼羅図』に描かれている東塔院の姿を彷彿とさせます。

(2) 東塔創建以前の様子

塔建設予定地は樹木を切らずに建てられる場所としたとする史料があり、その他、塔建立以前には興福寺別当坊の敷地であったという説が唱えられています（参考文献 ）。今回の調査で東塔建立よりも古い時期の遺構を検出したことによって、東塔院及びその北方周辺の一帯が、塔建立以前にすでに開発されていたことを発掘調査によって初めて明らかとすることができました。

(3) 今後の課題

今回の調査では解明できなかった課題があります。治承や応永に東西塔が焼失した際に、塔のみではなく、塔を囲む区画施設も同時に焼失したのかどうかという点です。2 時期の外側の雨落溝がある状況からみて、建替えられた可能性が高いと考えられますが、区画施設の構造の変更（回廊から築地塀への変更など）の有無も含めて、今回の調査ではこの点に関する明確な証拠は得られませんでした。区画施設の焼失・再建の実態を解明することは今後の課題であり、周辺調査の進展を待ちたいと思います。

参考文献

『春日西塔・東塔跡の発掘　殿下の御塔・院の御塔』奈良国立博物館 1982 年

『奈良公園史』奈良公園史編集委員会 1982 年

足立康「春日西塔と興福寺塔との関係」『塔婆建築の研究　足立康著作集 3』中央公論美術出版 1987 年

表 1 春日東塔の概略

元号(西暦)	事柄
保延 6 年 (1140)	東塔供養
治承 4 年 (1180)	平重衡の焼き討ちにより焼失
建保 5 年 (1217)	東塔再建
応永18年 (1411)	東塔雷火により焼失



図 1 春日宮曼荼羅図 (南市町自治会所蔵 鎌倉時代 部分)



図 2 春日東西塔院の位置 (参考文献 「博物館敷地内遺跡図」部分)



図 3 春日東塔院西面築地堀 (参考文献)

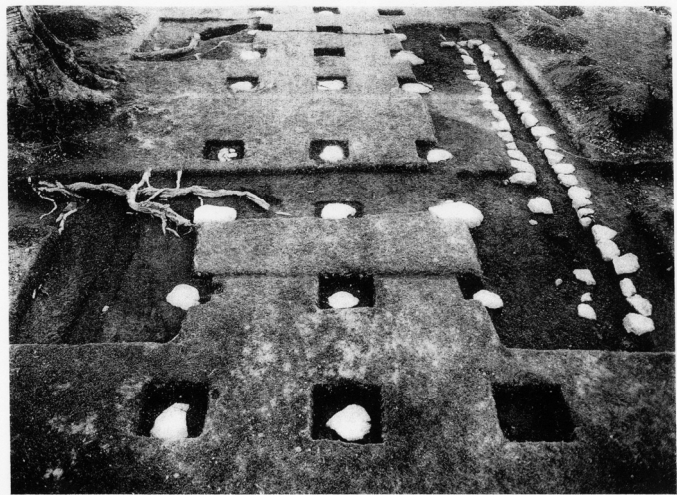


図 4 春日東塔院南門 (参考文献)

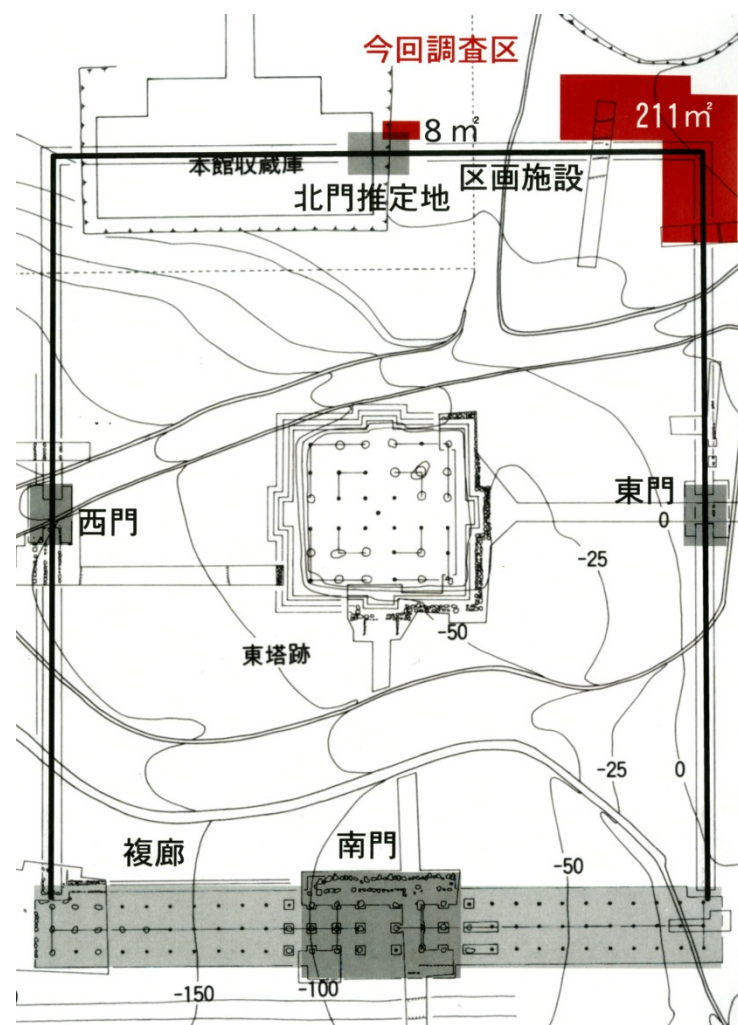


図5 今回の調査区（参考文献 に加筆修正）

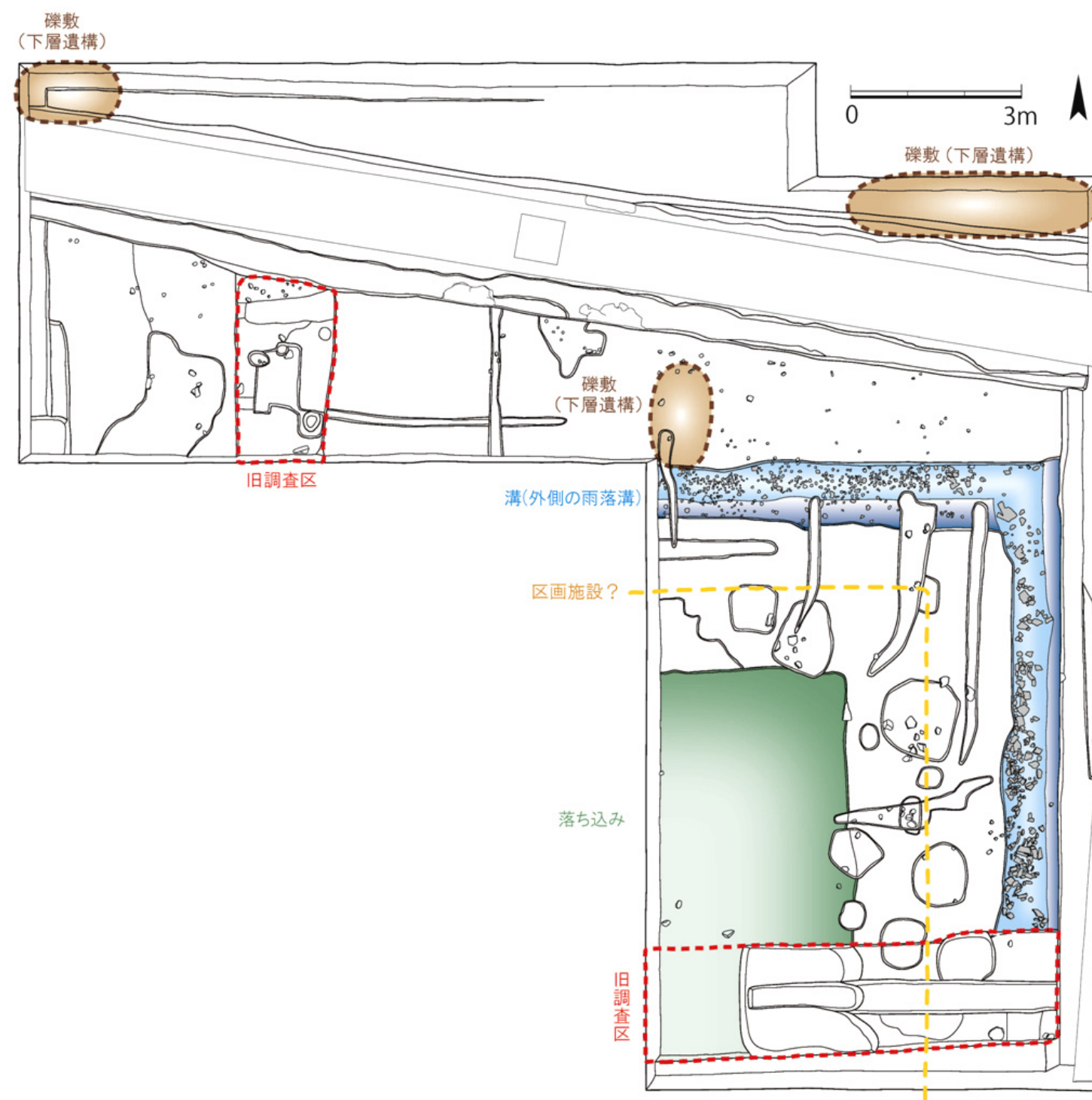


図8 春日東塔院 遺構平面図 1：100



図6 今回の調査写真（外側の雨落溝）



図7 今回の調査写真（下層遺構の礫敷）